



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 高岡先生を偲んで  |
| Author(s)    | 金崎, 春幸  |
| Citation     | Gallia. 2021, 60, p. 115-116  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/79402">https://hdl.handle.net/11094/79402</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 高岡先生を偲んで

金崎 春幸

私が阪大言語文化部に赴任したのは1983年のことだが、そのときは高岡先生がフランス語教育講座から言語文化部門に移られて、フランス語教育講座の空いたポストに私が入ることになった。研究室も、高岡先生のおられた三階南向きの居心地のよい部屋を使わせていただく幸運に恵まれた。当時は、高岡先生と私以外に、フランス語教育講座に大高先生、岡野先生、春木さん、言語工学部門に深谷先生という個性的な面々がフランス語教員としておられたが、高岡先生が潤滑油のようになってまとめ役を果たされていたように思う。やがて高岡先生は教授としてフランス語教育講座に戻られ、大高先生と岡野先生が定年退職されると、言文フランス語は高岡時代となった。高岡時代といっても、先生は玉座に君臨していたわけではなく、慈父のようにわれわれを温かく見守ってくださった。私が研究科長をしていた時期に、言語文化研究科で芳しくないことが立て続けに起こったとき、高岡先生は心配されて、「いっぺんお祓いしてもらわなあかん」とおっしゃっていた。先生が実際に祈禱師を研究科棟に呼んでお祓いをしてもらったことを、後日人づてに聞いた。確かに、ある時期を境に研究科から厄介なことが消え去り、平穏な日々が戻ったのである。

高岡先生が書かれたものの中には、先生ご自身が魔術師ではないかと思わせるものがある。Gallia XXXIにサラマンドラのモチーフに関する論文があるが、アリストテレスのギリシャ語の引用、プリニウスのラテン語の引用に始まり、古フランス語で書かれた動物誌、トゥルバドゥールの恋愛詩、それらをペトルルカが受けとめると同時に新たな出発点となり、イタリアやフランスのペトルルキストを経て、ロンサルへと受け継がれる様が怒涛の勢いで描かれる。モチーフ研究としては王道の展開なのかもしれないが、高岡先生の手にかかると、思わぬところから魔法のようにサラマンドラが次々と飛び出してきて、見る者は啞然とするばかりである。西洋古典からフランス16世紀・17世紀に至る線が先生の研究の基本軸だが、40代ではそこに聖書やインド説話などが加わり、50代では今昔物語がさらに加わって、魔法はより大仕掛けなものとなった。

高岡先生は膨大な文献を原語で読んでおられた。サンスクリット語やヘブライ語のことを「ものすごい面白い」とよく言われていたが、ギリシャ語やラテン語についてはそのようなことは言われなかったような気がする。ギリシャ語やラテン語は若いときから自家薬籠中のものとされていて、フランス語やイタリア語と同じく、ごく身近な存在であったのだろう。そう言えば、先生の愛犬の名前もアポロンであった。「ほんとはアポローンなんやけど」とおっしゃっていたが、

呼びやすさからそうなったようである。お宅にお邪魔したときは、アポちゃんと呼ばれていた。ギリシャの輝ける神がアポちゃんとして身近にいて、先生もご満足であったろうと思う。

高岡先生という思い浮かべるのが、「遊びをせんとや生まれけむ」という梁塵秘抄の一節である。ウェルギリウスやロンサールといった大詩人たちと遊び戯れ、ご家族やわれわれ同僚や学生たちを存分に楽しませ、自らも楽しまれて、この世を去られた。Homo ludens を地で行った高岡先生に、杯を献じたい。

(大阪大学名誉教授)